

# カンボジア王国サンボー・プレイ・クック遺跡の環境考古学研究

(指導教員) 山田 和芳

## 1. はじめに

古代カンボジア王国で栄えていたクメール文明は、世界的に有名なアンコール・ワットなどの遺構が造られたアンコール王朝の時代に最盛期を迎えたが、その発展過程を支えたのが真臘王朝の時代である。サンボー・プレイ・クック遺跡は真臘王朝の時代（プレ・アンコール期）の7世紀の古代都市跡であり、東側の寺院群は2017年に世界文化遺産に登録されている。それにも関わらず1894年に遺跡が発見された後、特に西側に広がっていたとされる市街地跡を裏付ける科学的データが不足していることに加え、遺跡全体の保存が脅かされているという現状もある。

本研究では、2023年におこなった遺跡西側（市街地側）の発掘調査時に採取した土壌試料の放射性炭素（ $^{14}\text{C}$ ）年代測定や粒度分析を実施して、土地の履歴を検討し、当時の環境や人間活動を復元することを目的とした。この研究成果は、遺跡内の保護対象を明らかにし、西側地区を東側の寺院群同様世界文化遺産に登録するため、不足している科学的データの基礎を築くことが期待される。

## 2. 材料と方法

2023年3月に西側の都城内地区で発見された環濠跡、溜池跡、水路跡、水田跡と推定される場所の9地点、合計16ヶ所においてトレンチを設け、その断面から5cm間隔にて土壌試料採取を行った。総数513の土壌試料に対してレーザー回折式粒子径分布測定装置を用いて0.1 $\mu\text{m}$ から2mmまでの粒度分布を求めた。その分布パターンの特徴から土層ごとに堆積環境を推定した。加えて炭化物や植物遺骸を用いた放射性炭素（ $^{14}\text{C}$ ）年代測定を行い、上述した粒度分析による堆積環境と合わせてトレンチごとに土地の履歴について総合的に検討した。

## 3. 結果

合計16ヶ所のトレンチにておこなった分析結果の中で、環濠跡とおもわれるトレンチJ(J1・J2)の

結果と考察について選択して述べる。

J1 トレンチでは1層、2層、4層は中央粒径、平均粒径とも約20 $\mu\text{m}$ を示す一方、3層および5層は中央粒径が約430 $\mu\text{m}$ 、平均粒径が約170 $\mu\text{m}$ と比較的大きくなる。また、5層は全体的に粒径にばらつきがあった（図1）。

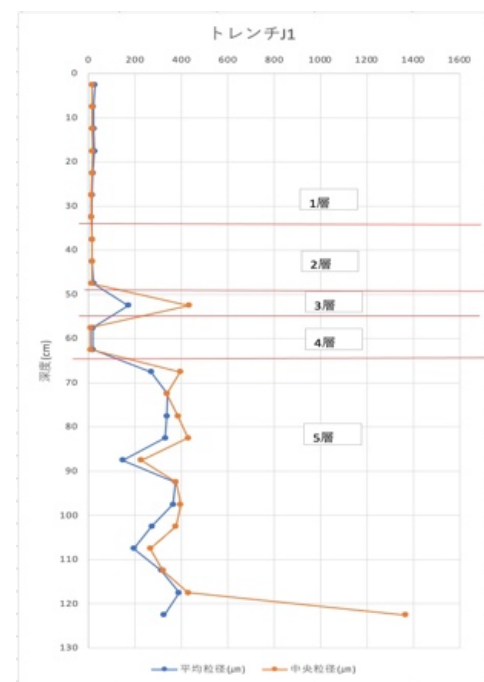


図1 環濠跡トレンチ J1 における平均・中央粒径値の鉛直プロファイル

## 4. 考察

本研究による粒度分布の結果と、 $^{14}\text{C}$ 年代測定による堆積年代値から、環濠築造のプロセスを以下の通り明らかにできた。

- 1) ほぼ平らであった土地を深さ1.5mほど掘り、掘った土は環濠脇の土手に盛土した。
- 2) 環濠内に水を流して機能化させた。水底下には7世紀以降と推定された細粒堆積物が形成した。
- 3) その後、何らかの要因により土手（盛土）が崩壊して、環濠内に流れ込んだ。
- 4) 王朝崩壊後、周辺の土壌が風によって環濠を埋めていった。